

防災・減災のページ

毎月11日掲載

第69回ワークショップ @宮城・亶理 荒浜・鳥の海

むすび塾

【観光地と防災】震災時、利用客らを避難誘導できたのは当時の所長や従業員のおかげ。「地震が起きたら上へ上へ」との言葉も頭にあった。施設の本格再開を来春以降に控え、利用客には津波の恐れがあることを伝えていきたい。心の備えを持ってもらうことが大切だ。わたり温泉鳥の海従業員・丸子輝子さん(74)

■むすび塾に参加して



【観光地と防災】震災時、利用客らを避難誘導できたのは当時の所長や従業員のおかげ。「地震が起きたら上へ上へ」との言葉も頭にあった。施設の本格再開を来春以降に控え、利用客には津波の恐れがあることを伝えていきたい。心の備えを持ってもらうことが大切だ。わたり温泉鳥の海従業員・丸子輝子さん(74)



【観光地と防災】津波被害の避難訓練は、町民だけでなく観光客も巻き込んで実施すべきだ。ワークショップを経営しており、津波の恐れがある際はオレンジ色の旗を掲げてサーファーに知らせることにしている。津波対策をマリン関係から広めていきたい。亶理町荒浜にぎわい回廊商店街代表理事・斎間祥夫さん(57)



【参加して】震災当時のことを振り返る貴重な機会となった。いざという時、自分の命を守るため迷わず避難する。その判断力を多くの人に持つてもらえるよう、語り部の活動を続けたい。町内で津波避難訓練の実施に向けた動きがあればぜひ協力したい。震災語り部の会「ワツタリ」会長・菊池敏夫さん(67)



【震災を経験して】震災時は、海から2*内陸にあるカソリンスタンドで業務中だった。防災無線は聞こえず、客から津波襲来を知らされて近くの常盤自動車道に駆け上がり難を逃れた。観光客の被災に備え、避難誘導の標識や防災無線を増やすべきだ。鳥の海ふれあい市場協同組合理事長・中嶋一昭さん(58)



【災害に備えて】家族で避難場所を決めたり、近くに住む要援護者を把握したりと、日頃の対策が安全確保につながる。「二度避難したら戻らないで」とも呼び掛けたい。震災時は支所に72人が避難したが、菓子箱がなかった。備蓄と避難訓練をしておくべきだった。亶理町荒浜支所長・渡辺恵子さん(65)



【災害に備えて】震災を経験しながら「もう津波は来ない」と思っている人がいる。聞いた時はショックだったが、だからこそ対策を練る必要がある。店ではお客さんの避難誘導が重要な課題。円滑に誘導できるように、マニュアルの作成から取り組みたい。鳥の海ふれあい市場協同組合職員・佐藤さやかさん(30)



【観光地と防災】ポイントは観光客の犠牲をいかに防ぐかの一点に尽きる。荒浜は被災地である前に観光地としての長い歴史がある。初めて訪れる人にも分かりやすい避難対策が重要だ。「安全に避難誘導できるから大丈夫」といえるような取り組みを進める必要がある。亶理町総務課安全推進班主事・遠藤匡範さん(29)

被災観光地の津波防災

河北新報社は7月27日、被災した観光地の防災をテーマに、通算69回目の防災ワークショップ「むすび塾」を宮城県亶理町荒浜の町営温泉施設「わたり温泉鳥の海」で開いた。地元観光客の意見交換。東日本大震災の教訓を基に、町外から訪れる人にも分かりやすい避難対策の必要性を確かめた。

わたり温泉鳥の海は、海のすぐそばにある鉄筋3階の建物。震災の津波で1階が損壊し、営業を休止。2014年10月に日帰り入浴を再開し、それ以降は1日1000人前後に利用され、観光復興のけん引役として期待されている。

震災当時、館内に残っていた利用客ら44人は従業員の誘導で4階や屋上に避難し、全員無事だった。支配人だった丸子輝子さん(74)は「帰宅を望む客が多かったが、説得して上階へ誘導できた」と振り返った。

一方、語り合いでは「車で避難中にこなくなった客がいたと聞いた。土地勘がなく、渋滞に巻き込まれたようだ」との証言もあった。

荒浜地区は海沿いにあるが、津波への意識は高くなかった。地元出身の参加者は異口同音に「昔から荒浜に津波は来ないといわれていた」「仮に来ても大したことはないと思込んでいた」と語った。

震災語り部の会「ワツタリ」会長の菊池敏夫さん(67)は「間違った言い伝えを信じてしまった。元・町荒浜支所長の渡辺恵子さん(65)も、住民が避難した支所について「食料や毛布などの備えが十分ではなかった」と提案した。



「わたり温泉鳥の海」の被災直後の写真を見ながら防災対策を話し合う参加者



語り合いに先立ち、温泉施設屋上から津波被災地を視察し、あの日を振り返った



写真①「わたり温泉鳥の海」に押し寄せる巨大津波

写真②津波や流木の直撃を受けて損壊した玄関ホール

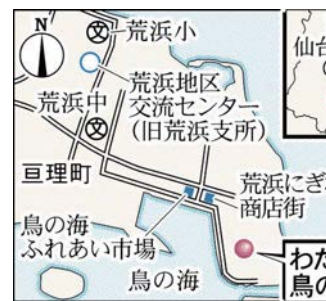
商店街など再建進む

宮城県亶理町は、東日本大震災で最大約7.7の津波に襲われ、関連死者を含め町民306人が犠牲になった。高台がないため、浸水範囲にわたり津波が到達し、浸水面積は町全体の約48%を占めた。

海に面した町東部にある荒浜地区は特に被害が大きく、犠牲者は151人に上った。

今回のむすび塾に参加した佐藤さやかさん(30)は温泉施設「わたり温泉鳥の海」1階で勤務中、津波に遭遇。垂直避難した施設の屋上などから被災直後の様子をカメラに収めた(写真①、②)。当時の写真をアルバムにまとめ、産直施設「鳥の海ふれあい市場」で公開している。

荒浜地区は町の水産・観光拠点。商店街と産直施設が再建され、わたり温泉鳥の海は来春以降、宿泊・宴会部門の再開計画がある。海水浴場の再開も検討されている。震災語り部の会「ワツタリ」は被災体験を視察客らに伝え、震災の風化防止に取り組んでいる。



専門家から

佐藤 翔輔さん(35)



東北大災害科学国際研究所助教(災害情報学)

にぎわいを取り戻しつつある東日本大震災の被災観光地が今後何をすべきか。観光客を迎える上で、石巻市の料理店組合の取り組みは参考になる。

組合は震災後、話し合いを重ねて地震・津波対応の「心得」を作り、それを各店の壁やメニューなど客の目に入るように明した。

震災後、沿岸部で津波避難の実態を調べた結果、素早い避難できた人には特徴があった。一つは、三陸で大きな被害が出た明治や昭和の大津波の史実を知っていたこと。もう一つは、災害時の対応を事前に家族で話し合っていたことだ。

これは荒浜地区にも当てはまる。災害の記憶を共有し、訓練で課題を見つけて改善する。まずは小規模でも津波避難の訓練を実施して、観光客に安心して訪れてもらえる環境を整えたい。

リスク確認で安心感